

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	尾曲 真一	指導教員 (主査)	新井 武志

論文題目	地域在住高齢者における身体機能の自己認識と転倒の関連性 ～複数の予測課題を用いた前向き調査～
------	---

本文概要

【目的】

本研究の目的は、地域在住高齢者における身体機能の自己認識に関連する要因を横断的に調査すること、身体機能の自己認識と転倒の発生について、複数の課題を用いて関連性を検討することであった。

【方法】

健康増進施設を利用する 65 歳以上高齢者 57 名を対象とした。除外要件として神経疾患等の既往を有する者や MMSE-J が 23 点以下の者と設定した。身体機能及び身体機能の自己認識の測定課題は、①Functional Reach Test (以下, FRT), ②Timed Up & Go, ③2 ステップテストを採用した。自己認識の評価指標は、実測値に対する予測値の誤差の比を算出後、絶対値に変換した値を使用し、予測誤差と定義した。身体活動量は、国際標準化身体活動質問票日本語版 Short Version を使用した。過去 1 年間の転倒歴と半年間の追跡調査期間における転倒の有無を聴取した。

【結果】

各測定課題の予測誤差と身体活動量に関連は認められなかった。FRT の予測誤差と 2 ステップテストの成績間に、負の相関関係が認められた ($r=-0.44$, $p<0.01$)。身体機能の自己認識と転倒との関連性については、いずれの測定項目も、転倒群と非転倒群の間に統計学的な有意差は認められなかった。

【考察】

因果関係は明らかでないが、移動能力が低下している者ほど、FRT の予測誤差が大きい傾向が確認された。先行研究との比較から、身体機能が高いサンプルの場合、身体機能の自己認識が転倒に及ぼす影響は少ない可能性が示唆された。転倒との関連性を検討する上で、身体機能等のサンプリングの違いを考慮する必要がある。

【結語】

身体機能の自己認識と転倒の関連性を検討する上で、対象者の属性を十分に考慮する必要がある。今後、移動能力と自己認識の乖離の関連性を縦断的に検討するとともに、転倒発生にどのように寄与しているか明らかにする必要がある。研究対象者を 1 施設に限定することなく、サンプリングの幅を広げて対象者数を増やすことや調査期間を延長して転倒との関連性を検討していきたい。(802 字)